

金剛峯寺蔵八大童子像について
—高野山をめぐる女性願主の造像—

東北大学 高橋 沙矢佳

現在和歌山・金剛峯寺に所蔵される八大童子像は、童子像の秀作として知られている。史料は、鳥羽天皇の皇女・八条女院(1137-1211)が願主となり、建久8・9年(1197・98)頃に行勝(1130-1217)によって高野山内に建立された一心院の本堂に安置されたもので、運慶(?-1223)の作と記す。本尊不動明王像は行勝自作の念持仏と伝えられ、一心院の創建にあたりその眷属として新たに付随された本像は、作風や出来映えに加え、月輪型木札の納入が確認されたことが傍証となって運慶作と認められており、その表現の位置付けや、運慶の工房制作の問題について論じられてきた。一方造像の経緯については、晩年の八条女院の心情が背景にあるとする説や、一心院創建当初の関係者がいずれも仁和寺と関わりを持っていたことから仁和寺の関与を想定する説、また文覚(生没年不詳)による空海ゆかりの真言寺院復興事業の一環とする説などがあるが、いずれも確定的ではない。

八大童子の教義は『聖無動尊一字出生八大童子秘要法品』に説かれている。それによれば、八大童子は行者に奉仕して悟りに導く存在であり、四智の四童子と、行者のなすべき行を示す四波羅蜜菩薩の四童子からなる。行者は四智の四童子をそれぞれ礼拝することで菩提心や福智、智慧が円満になり、さらに四波羅蜜菩薩の四童子が示す行を行い、功德を廻向することで悟りに至る。八大童子の各像には表現の区別が見られるが、そこにはそれぞれの童子の性格の違いが反映されていると考える。

『五坊寂靜院文書』中の延応元年(1239)二月八日付の「太政官牒」によれば、本像の安置された一心院は行勝に対する貴賤の帰依によって建立されたという。このことから、八条女院の本像発願の動機も、行勝に対する結縁にあったといえる。

八条女院による一心院への本像の寄進は、女人禁制の地であった高野山の結界の内側に対する、女性の積極的な関与ということができる。八条女院は、後に女人高野と称された高野山別所・金剛寺を祈願所としたり、代参を送るなど高野山に対する信仰が他にも伝えられている。美福門院(1117-60)の高野山菩提心院に関する願文に見えるように、女性は、仏像や堂塔の発願、代参などによる高野山への結縁によって、往生できると考えられていた。

以上のことから、本発表では本像を、八条女院が高野山で修行する行勝に結縁することにより、往生を遂げることを願って発願したものと位置付ける。仏像の寄進は女性が霊場や行者に結縁する手段の一つであったが、本像においては、特に行勝への帰依のために行者に仕える働きを持つ八大童子が選択されたと考えられる。そのことを踏まえると、本像の端正な容貌は、僧侶に仕える寺院の童子や仏教上の護法童子のイメージの反映と解釈できる。女性と霊場、女性と行者の関係を示す一例として、本像の持つ意義を新たに提示したい。